

卒研発表会感想(続き)

1月30日実施

高松 和輝

卒業研究発表会を終えて、ここまでご指導頂いた田中先生と研究室のメンバーには、感謝の気持ちでいっぱい입니다。卒業研究を始めたころ、新型コロナウイルスの流行によって、卒業研究に支障をきたすのではないかと感じていました。そのような中で、田中先生はすぐさまリモートで卒業研究ができるように様々な対策をしてくださいました。そのおかげで、私たちは4月からすぐに卒業研究に取り組みることができました。正直、卒業研究が始める前は、ただ卒業ができればいいと考えていました。しかし、ゼミなどで田中先生や研究室のメンバーの真剣さを感じ、それに感化されるように次第に私も真剣に取り組んでいくようになりました。私の卒業研究の成果はあまりいいものではないですが、一つのものを作り抜くというだけではできず、感じていきます。多くの苦労や挫折を経験しましたが、同時に乗り越える力が身に付けたことが大きかったです。この経験を、これから人生に大いに役立てていきます。また、3年生の皆さんの中には、私がそうであったように、ただ卒業ができればいいと考えている人がいるかもしれせん。もし、そう考えている人がいたら、少し卒業研究に真

剣に取り組んでみてくださいます。これからの田中研究室を応援しています。

竹谷 啓吾

1月30日に卒業研究発表会を行いました。4月ごろから約10ヶ月間、ほぼ毎日卒業研究について考えてきたため、発表を終えた今、達成感を味わうことができ

ています。この10ヶ月間は就職活動や資格の勉強、クラブ活動、アルバイトなどと並行して、常に研究を進めなければいけなかったため、元々マルチタスクが苦手な私は、失敗もいくつか経験しました。その度に、的確に指導してくださった田中先生には心から感謝して

います。その他にも、田中先生からは、これからの私たちに必要なことを多く学びました。卒業研究の内容は、元々自分が興味のあるものでした。研究に疲れることはあっても、嫌になることはありませんでした。1年前の自分と今の自分を比較すると、知識もかなり増え、成長を実感できます。もちろんまだまだ未熟ですが、学び、成長することの喜びを実感できたことは貴重な経験だったと思います。

発表自体は、鹿児島大学との合同研究発表会を経験していたこともあり、落ち着いて臨むことができました。似た分野の発表がほとんどでしたが、それでも知

らないことが多かったら、自分が無知だということとを再認識するためにも、このような機会は必要だと感じました。

藤阪 静哉

卒業研究発表を終えて、研究室配属直後は人前での発表することに苦手意識をもっていました。毎週の進捗報告でパワポを使った発表をこなすことで本番の卒論発表会では悔いを残す事なく終えることが出来たのではないかと思います。

鹿児島大学との合同発表会での反省を活かして、パワポの構成を変えて、録画を見返して話し方を意識して変えることで卒論発表会では自分の中で良いと思える発表ができました。

1年間の研究を振り返って、プログラムが思う通りに動作せず何度か嫌になりそうなの時がありました。インターネットで調べて自分で解決することもあれば、同期の人たちから教えて貰ってプログラムがうまく動作することがありました。

研究が無事に終わることができたのは田中教授をはじめとする田中研究室メン



荻野 敦史	YOLOを用いた拳手の検出及び顔認証を用いた拳手者の特定と応用システム研究
笠井 健	ディープラーニングによる将棋AIの強化
金岡 駿介	境界検出および文字認識による書籍の特定システム
岸 篤	LSTMを用いた筆記者識別
櫻井 将太郎	YOLOv4による多数の人の検出及びカウント
高松 和輝	屋内居住環境における人の行動推定
竹谷 啓吾	Deep Learningによる様々な数字のOCRと応用
藤阪 静哉	全身姿勢のAI判定を含むHIITトレーニングの自動化システム



バールたちの支えがあったおかげです。改めてこの研究室に配属することができて良かったと思います。ありがとうございました。よろしくお願いします。

他のゼミ生の感想

張 伯聞(M1)

今回は知能情報学の卒業発表会を聴講しました。特に私たちの研究室の皆さんの卒業研究はより実用的、面白い研究だったと考えています。私は皆さんの良い発表に見習って来年も自分の良い修士発表を迎えたいと思います。将来是非皆さんの研究を会社と生活と共

に活かせるよう、お祈りします。最後、4年生の皆さんは社会人になる直前の学業を成し遂げることに、おめでとうございます！

大野 皓平

今回、卒業研究の発表を聞いて初めに感じたことは、来年自分もこの発表をしていると言うことです。自分は留年してしまっていて、同い年がしっかりと研究してしっかりと発表しているのを聞いて正直にすごいなと思ったし、他の研究室の発表も少し聞いたのですがうちの研究室は他と比べて内容もしっかりしているなと思えました。同い年の子がみんな研究していて聞ける人の話を聞いていたんですが、何回もやり直していいから聞いて、今のうちにできることはしておこうと思

います。来年自分が発表する時、将来役に立つような研究をしたいと思います。今の自分は、全然力不足であるしあんな発表をし

ろと言われてもまだ無理だと思えます。この一年、し

石川 采璃小

つかり田中先生の言うことを聞いて真剣に取り組みたいと思えました。

大森 聖斗

皆さん凄く研究をしているので、自分の卒業研究テーマが本当にこれでいいのか不安になった。

岸 春樹

発表方法や教授陣からの質問など、自分が発表側になつたときに何を聞かれても答えられるように自分の研究を深く知っておく必要があると感じた。

藤川 敬太

他研究室の発表を含めて見て、実際のレベルまで突き詰めれば実用レベルになるのか、学生の知識でそこまで持つて行けるのか不安になりました。ほかの先生方からの質問やアドバイスの対応できるように自分の研究についてしっかりと理解しておかないといけないと思

様でした。通信トラブルはあったものの、発表はどの方もスムーズで、内容がまとめられていて非常に聞き取りやすかったです。4年生の方々や田中先生の試行錯誤によって今回のような素晴らしい発表会を行うことができたのだと感じています。発表内容については結果が思っていたものとは違つたとしてもありのままを発表し、問題点や改善点を考え今後の研究に生かしていくという姿勢が感じられ、成功だけが全てではないということを教わることができました。私はこういった研究発表をしたことがなかつたので非常に参考になりました。私は4年生がしていた研究を引き継ぐことが決まつたので、特にその発表を注意深く聞きま

したが、より質の高いものができるか不安でいっぱいですが一生懸命頑張りますのでよろしくお願ひします。

今年度の卒業研究は、コロナで始まつたので、果たしてどうなるのか、まったく読めない状態から始まつた。授業の準備のための期間として、大学は2週間を

設定し、その期間、正式な授業はなかつたが、当研究室では、Zoomを使って、4月の最初からゼミを開始した。

指導教員の思い

田中雅博

それに伴い、春休みからテーマの設定をし、それに対する準備をFacebookやLINEをフル活用して行つたおかげで、当研究室のゼミはよい滑り出した。その後、ゼミは9月の半ばまでは基本的にオンラインで行つた。ゼミ生同士があまり会えなかつたのは残念だが、オンラインで会話してきたのは、リアルな対面と同じとは言わないが、そこそこ人間関係も深めることができ、例年とほとんど変わらずに学生たちと親密になれたような気がする。

研究の中心に関しては、コンピュータ上での計算が主体で、実際に現場で行う実験は比較的少ないテーマだったのが幸いして、さほどそれに関して不足した感じはしていません。最後は発表会までオンラインということになつてしまつたが、4年生の諸君の感想を読んでもみると、喜怒哀楽がそれなりにあつたと思われ

る。井の中の蛙にならないよう、本来大学院のイベントである、研究成果発表会にほとんどの卒研生に出てもらつたり、鹿児島大学との合同研究会で全員発表したりした。それによって、多くの学生は新しい知見やモノの見方を学び、飛躍した様子

対外予定

3月1日~3日 NCS P2021に張君論文提出(オンライン)。

5月9日(火)~11日(木) システム制御情報学会研究講演会(SCI21)(オンライン)に、参加予定(張、荻野、岸、田中)

編集後記

2月は、いろいろなことが終わりの区切りをつけるとともに、新しいことが始まる時期でもあります。当然ながら、年が明けてからバタバタしても何もできないはずはありません。3回生の卒業研究は実質的に2月に始まり

ます。昨年ともそうでした。就職活動も、そろそろ本格化します。これも、付け焼刃でお辞儀の角度や慣れない敬語を急ごしらえて学んでも、何の役に立ちません。それが通用するのはバイトの世界だけでしょう。

自分自身の目標がきちんと立てられない人が多いと感じています。自分自身の努力と成果を信じていることができず、この会社

が採用するでしょうか。会社は教育機関ではありません。自分をコントロールすることができるようになること。これが最初の1歩です。(田中)